

海龍王寺
十一面觀音像
重要文化財

海龍王寺の本尊であるこの像は、仏教の慈悲の女神として知られている慈悲の菩薩、観音の像である。観音は人々を病気から守り、食べ物や富を確保する手助けをすると考えられている。11の顔は様々な表情をしているが、一番大きな顔は慈悲と静けさを醸し出している。11個の顔の意味には諸説あるが、悟りに至るまでの道筋の10の段階を表しており、11番目の一番上についている顔が悟りを開いた状態を示している、という解釈もそのひとつである。

この像は鎌倉時代（1185～1333年）につくられた。熱心な仏教徒であり、海龍王寺、東大寺、興福寺といった寺院の支援者であった光明皇后（701～760年）が彫った十一面観音の像をもとにしている。